普段着のわたしたち

GW.に、陸上自衛隊に勤務している長男が帰省してきました。すると、「ニワトリが死にそうだ」と、上官から電話がありました。私は国家機密にかかわる暗号かと緊張しましたが、そうでなく駐屯地で飼っている鶏でした。山中でのサバイバル訓練中の際、後方支援のヘリがやって来て、生きたままの鶏が投下され、下でそれを追っかけて捕まえ、ナイフでさばいて調理し食べるという動画を YouTube で見ました。寺の息子である長男は、食事後に亡き鶏に戒名をつけ葬式をする「特命係」です。鶏には院号のついた立派な戒名がつけられていて笑いました。そう言えば彼には、動物の弔い方を教えていなかったです。

俊徳丸

先日コストコで購入したカーペット（約 2 畳）。色も鮮やか、絵もかわいい、動物もたくさん描かれており、足触りもよく、お値段以上。

息子が喜ぶと思いきや、「日本はどこ？普通の地図と違うよ」と。日本は右端にちょこっと、お城のマークのみ。　国によって地図の描き方も違う事を学んだことでしょう。タグを読むとスミソニアン（アメリカ）デザインとありました。コストコですからね。

訶梨帝母

皆さん、観ておられますかな？もちろん『鎌倉殿の 13 人』です。5 月中旬現在ですと平家が滅んでしまいました。

ちょうど今月号の『私説法然伝』でも書かせていただいた源平合戦、とくに一の谷の合戦の様子もちゃんと放映されました。残念ながら我らが熊谷次郎直実は登場しませんでしたが、三谷幸喜脚本は実に面白い一の谷合戦をやってくれましたね。ますます目が離せない展開です。　征阿

バーゲンにかこつけて購入しました。不肖の息子にはまだ早いですが、ゆくゆく一緒に遊べたらいいなと思っております。今は書籍もデジタル化が進んでいますが、紙には紙の温もりがあります。手の平や指先を使って、その温もりを感じて欲しいと願っています。

やっさん

岐阜県美濃地方では、遺骨は土に還すという慣習があります。納骨後の骨壺をお持ち帰りにならないので、「綺麗に洗って梅干か佃煮でも入れておいては」と提案するのですが、優しく拒絶されます。

境内の南高梅の実が膨らむのを見て「SDGs の観点からテストに協力してもらえないか」と囁いています。迷走ボー

自然、自然 ～私を動かすもの～

遅ればせながら、植栽に勤しんでいる。

とはいえ、春先とは一味違った寒暖差に気力、体力を奪われ、活力の低下から気だるさを感じる毎日を過ごしている。

初夏を迎えてからの日中は本格的な夏を思わせ、蠢く命も続々と出現し始めてきた。初々しかった草木の若葉も日々色濃くなり、段々頼もしくなってきている。身体がついていかないから少し待って欲しい、なんていう私の気持ちとは裏腹に自然は自然に運行し、その歩みを止めることはない。

今季はお稲荷さま周辺の植栽に力を入れるつもりで、縁起の良さそうな黄金マサキの小振りな苗を10本購入した。苗の生長を予測しながら植え込み位置を定め、購入した店の店員に説明された通り御社の周りを囲うように植え込んでいった。

それなりの作業を終えた途端、初めて育てる植物であるが故か、一抹の不安に駆られた。果たして、しっかり育ってくれるだろうか…。その時、ある言葉を思い出した。

「自然は、自然がつくるんだよ」。私が東京に居る頃、境内に新しく植樹したモミジが根付いてくれるか心配していた時に、役員の一人が掛けてくれた言葉だ。その方は続けて、「木というものは環境に合わせて生長するものだよ。だけど、人の勝手で植える訳だから、出来ることはしてあげないといけないよ」と、教えてくれた。

自然は自然がつくる、けれども出来ることはしないといけない。

ふと思い出した一言に触発されてマサキの植え方について調べ直すと、よりよい環境を調えるために腐葉土や有機肥料を加えること、植え終えた後にたっぷりと水を注いであげることが分かった。これらはマサキの育成に限ったことではないが、指導者のいない素人の私からすると大いなる教示である。

早速、植え終えたマサキを丁寧に掘り返し、腐葉土と有機肥料を加えて植え込みながら根にしっかりと土が纏わりつくよう木の棒で優しく突く。そして、そこにたっぷりと水を注いでいった。

うん。先程よりも、格別の安心感がある。他に出来ることといえば、日々気に掛けることだろう。あとは自然に自然とおまかせする。

種を蒔き、苗を植えるにはそれぞれ適期というものがある。よくよく考えてみると、植栽も常に変化する自然の自然な運行に合わせて勤しんでいるだけである。どこまでも自然の掌中に生きているのが私たちで、自然が私たちに合わせている訳ではない。

気だるさを感じる毎日ではあるが、自然の営みに身を委ねてみると不思議な働きを自然に感じることがある。その働きは私の小さな都合を忘れさせ、ものぐさな私の心を突き動かす。さらに働きの正体は何かと考えると、それもまた自然ではないかと思うのである。

あ、つぎは河骨（こうほね）が咲きはじめた（にっこり）。

やっさん

こもりうた89

「おっかのうえ～ひ～なげしの花で～占うのあ～の人の心～」

この春、宿根草の為に庭の傍らで養生していた鉢に芽吹いた葉。ん？去年ここに居た子と様子の違う葉が出てきたな、と眺めていたらコレ。どうやらヒナゲシのようです。

色も優しく可憐な花なので暫くは水を与えて眺めておりましたが、気づくと近隣であまた見かけます。側溝脇コンクリートの隙間、街路樹の足元、容赦なく芽吹く生命力の強さ。「最初の清楚な印象と違って随分気がお強い」とでも申しましょうか。少し気になり調べてみました。するととんでもない厄介者ということが判明しました。

その一見可憐に見えたお嬢さんの名は「長実雛芥子」。日本で最初に発見されたのは1961年東京都世田谷区。そもそも園芸種として輸入されたわけではなく、輸入作物に種子が混ざって広まったのだそうです。その名の通り「芥子粒」の細かな種子が、車のタイヤ、人の靴裏や風によってあちこちに運ばれて爆発的に勢力拡大。1株で15万粒。土壌を選ばず発芽適温も守備範囲が広く、今やほぼ全国制覇。他植物を圧倒するその繁殖力は外来種ながら賛美に値する優秀さ。とうとうわが町、わが庭にも降臨。

さらにこのお嬢さん、厚かましいだけではなく、毒まであるのだそう。無論、「育ててはいけない芥子に含まれる麻薬成分」ではありませんが、アルカロイド性の有害物質があり、素手で触るとかぶれる事と、アレロパシーによって他の植物の育成が阻害されるそうです。

「ごめんなさいね、知ってしまったら、もう貴女をココへは置いておけないわ。私の庭には丹精込めて育てた大事な子たちがいるの。世間知らずの箱入り君たちは、貴女の色香に目が眩んできっと侵食されてしまうわ。貴女が多年草でないと聞いて少し安心していますが、油断はできないわね。少々手荒ですけどお許しあれ。」と、まだ花を咲かせていましたが、親の仇とばかりに根こそぎ駆除いたしました。

夕方学校から帰ると、朝顔と紫陽花に水やりをする息子。「ママ大変、ここのポピーがなくなっちゃってる。」

「いいの、ポピーの事はもう忘れなさい。あの子には毒があったの。触ると赤いボツボツができるのよ。だから私が始末しました」

「あそ」

（あら、意外とあっさり諦めたわね。泣かれなくてよかったわ。また私が綺麗な子を探してくるから…）

なにやら十数年後のやりとりを暗示するようなお話になりました。

訶梨帝母

よくぞお引き受けいただいた

近況を知りたくて、「総本山光明寺　画像」でググってみましたら、なんと、３月に入山式に臨まれた第八十八世法主、香空教英猊下のお写真が誰でも拝見できるようにアップされていました。

建久９年の創建以来 824 年、史上初の女性ご法主です。著作権の関係でここには転載を控えますが、「気負わず　泰然と」と表された優しいお顔をスマホでご覧いただけます。

資質・実績があっても女性や人種などを理由に一定の職位以上には昇進させようとしない組織内の現象を「ガラスの天井」と呼びます。「目には見えない障壁」です。

世界各国に女性大統領・首相が誕生しています。お寺へお参りの方の過半数が女性です。その時代に、性別や年齢を理由に人材登用を怠っている国や組織に将来があるでしょうか。

入山之疏に次の一節があります。

「時恰も寺院を取り巻く環境は混沌を極め世相また不安にして人情浮薄なり　此の世情に当たり宗門の興隆と教学教化の進展を期し時代即応の体制を整えるの要　今より切なるはなし」

檀家制度が崩れ、安定収入を確保できない寺院が毎年消滅しています。お寺も他の業界同様、収入格差が広がっているのです。さあ、どうすれば良いのでしょう。

出家者が生涯かけて追求したいものと、在家者が求めるものとは違います。

「坊さんは声の良い人が一番。ぶさいくな坊さんの説法など聞きたくない」こう書き残したの誰だと思います？

清少納言です。平安時代随一の才女がこのミーハー振りなのです。

当時の貴族はこぞって高僧に授戒を求めました。今でいう現世利益です。法然上人はその求めに応じられています。「応病与薬」です。

連休中に、当山へ３人の中学生が揃って着物姿でお参りになりました。高校の合格祈願と十三参りです。その際、了解を得て撮影した写真を Facebook にアップしましたら、リーチが 365 ありました。通常の３倍です。

毎日、テレビで観るニュースは暗いものばかり。お寺＝お弔いという印象が固定しています。お寺がお慶び事の場になり、華やかな雰囲気に包まれている。「いいなぁ」と思って、クリックしてくれたのでしょう。

十三参りは京都・大阪では盛んですが、東海地方ではほとんど知られていません。この儀式を広めたいと思うのは私の勝手な願望ですが、ホームページで知って、うちの子にもと遠方から車を飛ばしてお越しになるご家族は笑顔で佛様に手を合わせておられます。

お寺が取るべき「時代即応の体制」は、お参りになる方が教えてくださる、真摯に向き合えば良い、と信じています。　　迷走ボー

お稲荷さまとの交換条件

静岡県知事の川勝平太さん、あなたは昨年7月の同県知事選で4期目の当選を果たされ、私は大変落胆いたしました。いい加減、JR 東海リニア南アルプストンネル工事（9㎞弱）に対して難癖をつけるのはおやめください。水源にトンネルを掘ることで川の水量が激減するというあなたの説は無理があると思います。JR 東海もそれに対する解決策を先日副知事に提出しました。それに対しても知事は聞く耳持たないという態度をとっておられる。それどころか、最近では JR 東海に対して県への助成金を求めておられます。全く論点がずれてきています。まるで反社会者のお振る舞いです。現在、県内には熱海・三島・新富士・静岡・掛川・浜松の6駅もの新幹線駅があるではないですか。そんな都道府県は他にありません。リニア東京大阪間が営業運転すれば「のぞみ」が廃止され、静岡県内の駅には多くの「ひかり」が止まることになるでしょう。また、東京大阪間が現在の「のぞみ」の所要時間の半分になり、更に海外からリニア受注となれば、日本の国益に貢献するでしょうに…

私のお寺にはこんな言い伝えがある。当境内には、関ヶ原の合戦の5年前から鎮守の森にお稲荷さまがお祀りされている。地元では通称「鉄道稲荷」と呼ばれている。お寺の横を JR 東海「東海道本線」が走っている。岐阜～尾張一宮間が開通したのが明治 22 年。それに伴いお寺の前の木曽川では鉄橋を建設していた。完成間もない頃、保線作業員の親方が4代前の住職（私の曽祖父）に相談しに来たそうだ。毎日一人ずつ工事中に橋の上から作業員が川に落ちて、更にそれが一週間も続き気味が悪いのでお祓いを…ということだった。幸い死者も怪我人もなかったそうだ。すでに数日前から曽祖父には原因がわかっていた。お稲荷さまは木々に囲まれて薄暗く、静寂な場所をお好みになる。鉄橋工事の騒音に対して難儀しておられたとの事。曽祖父はお祓いではなくお稲荷さまの所へ行き、なんとお稲荷さんを丁寧に説得したそうだ。「鉄道」がどういうものか。それが、これからの日本の発展にとれほど大切なものか。開通したら蒸気機関車というものが一日に何回も毎日走るという事を。説明し、お稲荷さまに辛抱していただくために長時間話し合い納得していただいたそうだ。すると次は、お稲荷様が交換条件を出された。曽祖父は、それが実行可能だったので承諾したそうだ。その際、出来ないものは出来ない！とはっきり断ることが肝要で、そうでないと命をとられる。これらは寺の住職を代々務める家訓的なものとして、私も中学生の頃父から習った。そんなやり取りがあり、明治22年無事に営業開通したのだが、明治24年10月28日、この地を「濃尾地震（最大震度7・M8.0）」が襲い付近の家屋はすべて全壊した。その際に長良川の鉄橋は崩壊したのに対し、お寺の前の鉄橋はびくともしなかったということで、人々はお稲荷さまのお守りのおかげと噂が広まり、いつしか国鉄時代の保線作業員を中心に、「鉄道稲荷」と呼ばれるようになった。震災直後から曽祖父は、本堂再建のために得意の「法然上人一代記」を各地で語り、一生をお説教に全国を歩いた。それがお稲荷さまとの交換条件だったのであろう。　俊徳丸

『私説法然伝』（８８）

助けてほしい③

先月号では法然上人の弟子になりたい若者について書きました。今月号は法然上人の弟子になりたい武者について書きます。

【なぜ坂東武者達の中から法然上人の弟子になりたい者が現れたのだろうか？

名だたる武者が法然上人の弟子となっている事実がある。その理由を知るには、どのような武者がどのような経緯で弟子となったのかを知れば、その理由も浮かび上がるかもしれない。

武家・武者出身の弟子の中で最も有名なのが熊谷次郎直実（くまがいじろうなおざね）その人であろう。『平家物語』の「敦盛最後の事」で平敦盛を涙ながらに打ち取るのが熊谷次郎直実である。

熊谷次郎直実は、永治（えいじ）元年（一一四一年）武蔵国熊谷郷に生まれた。父の代より熊谷の地を所領としたので、熊谷を名乗った。父の熊谷直貞が早くに亡くなったので、母方の伯父の久下直光（くげなおみつ）に育てられる。保元の乱、平治の乱に参加。十代の頃から戦に参加していたのである。伯父の久下直光の家人として京の都で働く事に嫌気がさして名将であった平知盛に仕えたという。その関係からか、大庭景親（おおばかげちか）が頼朝挙兵に備えて相模国へ帰還する。それに伴い直実もまた関東へ帰還する。その後、頼朝の挙兵時には大庭景親の下で平家方として戦うが、石橋山の戦い以後は頼朝配下の御家人となる。そして頼朝の佐竹攻めで武功を上げ、熊谷郷の所領を安堵されたのだが、この時点で伯父の久下直光とは完全に不仲となった模様である。

源頼朝が「鎌倉殿」として関東の「王」となり、直実は久下直光の配下ではなく、鎌倉殿の配下として独り立ちしたわけである。そして対平家との最終合戦には最前線に配属されるのである。しかも本軍とも言える源範頼麾下ではなく、別働隊または特殊部隊とも言える源義経麾下で戦うのである。

源義経の源平合戦と言えば、一の谷の合戦がまずその筆頭である。言わずとしれた一の谷の戦いの逆落としがあるが、この逆落としは七十騎ほどの精鋭によって行ったと伝えられる。当時の義経軍は一万騎とも言われるているが、義経は総大将として動くのではなく、生まれついての前線指揮官であった。軍勢を分けて動かし、自身はあくまで前線指揮官として最前線の小隊規模を率いた。その中に直実もいたのである。そして逆落としという日本戦史初の特殊部隊による奇襲作戦、その最前線にいたのが彼であった。それが彼という人物がいかなる人物であったのを如実に示しているのである。**】**

以下次号に続く（征阿）

熊谷之次郎直實像／北村西望作ブロンズ製（JR 熊谷駅北口）